2011年　9月6日・「長崎新聞」では

寄稿　「山田かん全詩集」刊行に寄せて
　　――活水女子大教授　田中　俊廣

8月9日。長崎が原爆で焦土と化した日付に合わせ、「山田かん全詩集」が刊行された。同じく、14歳で被爆した作家・杯京子さんの推薦文（帯文）にまとわれた黒を基調の装丁は、原爆を中心に国家社会、平和、ヒューマニズムを追究し続けた詩人の全業績にいかにもふさわしい。

原爆落下中心地碑の簡潔な黒御影石の三角柱と呼応しているようにも思える。7冊の詩集と拾遺作品を含む約550編の集成、623㌻の重厚な造本。

詩編の中では、まず第1詩集「いのちの火」（1954年）の収録が貴重である。全編が自死した妹へのレクイエム（鎮魂曲）であるが、孔版印刷（ガリ版）の詩群は、以後の詩集やアンソロジーなど、どこにも再録されていない。

2歳年下で、被爆後を共に生きる同行者であった妹の、心の闇と傷に寄り添うことのできなかった悔恨と自責、そして限りない愛がひしひしと伝わってくるこの詩集は、刊行したものの、自分の中にだけ大切に封印していたかったのかもしれない。「黒のオーバーが残された／沢山（たくさん）のオーバーの／冬にいて／琇子（ゆうこ）／お前は姿が無い／妹と／同じ色合の／オーバーの流れの／中にいて／黒のオーバーは／君ではない」（「黒のオーバー」）

この喪失と愛と生命へのこだわりは、以後の詩業の根底ともなり、さらに社会性という広がりが深く加わり、山田かんの真のオリジナリティーが形成されていく。

例えば、詩「地点通過」（1955年）から「八月」（1979年）への変容の過程に、思想が立ち上がる躍動的な様相を確認することができる。「地点通過」は、「ぼくの頭蓋の暗みに懸けられた／スクリインでは／人肉がまだ燃えつづけている」という〈記憶の固執〉（詩集のタイトル）が消えず、原爆落下地点を通過できないという心象の痛みを強く打ち出している。

ところが24年後の「八月」は、同じ〈記憶の固執〉に「アウシュヴィッツの深い傷痕」を抱えて「セーヌ河に身を投じ」たパウル・ツェラン、そして広島で被爆した作家・詩人の原民喜の鉄道自死をも組み込みながら、戦争の不条理と被害者の消えることのない痛苦を鮮烈に浮かび上がらせている。

この二つの作品の展開の中で、山田かんは、原爆を個人的経験からグローバルな問題へと普遍化している。個を深く掘り下げることに加え、社会的世界的な横の広がりを帯びた思想へと高めているのである。それは外部への鋭い批評精神とともに、自己の傷をえぐるような厳しい内省なしには成立しえない。原爆を書き続けた唯一無二の思想詩人の現出を、この全詩集ではたどることができる。

ほかにも、風土や民衆や家族への親愛などを描いた作品も、また山田かんの一面である。遺作「瀬戸夕暮（せどひぐれ）駅」の、来世と現世との間の幽明境の妖しく切ない魅力にも触れたいが、すでに紙幅は尽きてしまった。

と紹介されています。